



2024年（令和6年）
7月号（No. 950）

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に
含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

令和6年度通常総会を開催 収益改善や会員数確保に向け前進を

6月22日、日本山岳会令和6年度通常総会が東京・四谷の主婦会館・プラザエフで開催された。「令和5年度事業報告」「令和5年度決算報告」「定款施行細則改正」「令和6年度役員（監事）の選任」を審議、いずれも原案どおり可決・承認された。また、9月から予定されている本会学生部による海外遠征が紹介された。

令和6年度の通常総会は、東京・四谷のプラザエフにおいて6月22日14時から開催された。会場には役員13名のほか会員84名、合計97名が出席した。同時に、全国の会員に向けてオンライン配信も行なった。

■橋本しをり会長の挨拶

総会の開会に当たって冒頭に、就任1年目となる橋本会長から挨拶があった。

挨拶があった。

「新型コロナウイルス感染症が出現して4年半が経過し、ようやく制限はほとんど解除されるようになりました。この間に生じた負の影響を取り戻し、さらに前進したいと考えています。」

そのための行動指針・理念として、理事会で日本山岳会のスローガンやビジョン・ミッションを作成いたしました。資料の最後のページに掲載されています。

目次

令和6年度通常総会を開催 収益改善や会員数確保に向け前進を…	1
支部長が代りました	4
泰澄祭(5月26日)	5
ウェストン祭(6月1日・2日)	6
播隆祭(6月2日)	8
追悼	9
山の名著再読	10
東西南北	12
活動報告	
科学委員会	13
図書委員会	14
緑爽会	15
受入報告	14
図書紹介	15
新入会員	16
会務報告	17
ルーム日誌	18
INFORMATION	18
編集後記	19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月～金……………10～20時
第1、第3、第5土曜日……………10～18時
第2、第4土曜日……………閉室

1ページに掲載いたしました。具体的な説明は後日、会報にてお知らせいたします。」

次に定款に則り橋本会長が議長となつて審議、報告などが行なわれた。

最初に定足数の確認があり、「出席者97名、委任状提出772名、議決権行使書提出2069名の合計2938名。総会員数4069名に対し72・2%となつており、本総会は有効に成立している」と久保田総務担当理事から報告があった。

《審議事項》

◆第1号議案 令和5年度事業報告(案)の承認の件

◆第2号議案 令和5年度決算報告(案)の承認の件

まず長島泰博総務担当常務理事から事業報告の要旨について説明があった。

会の活動はコロナ禍以前に戻ってきているが、会員数の減少や高齢化が進み、以前どおりではなくなっている。だが、創立120周年記念事業を筆頭に盛んな活動が行なわれ、理事会も新しい執行部体制下で活発な活動を開始した。入会者数は順調に増えているものの退会者の数が上回るため、会員減は続いている。

続いて、南久松宏光財務担当常務理事から決算報告について説明があった。

当期も一般正味財産増減額は△304万1000円となり、赤字決算となった。令和4年度の△524万6000円、令和3年度の



橋本しをり会長(右から4人目)を議長として議事が進行された

たことが大きい。結果、当期の経常収益の合計は9747万8000円となり、921万9000円の増収となった。

事業費は前期の8908万5000円から当期は9633万9000円へと725万3000円増加した。創立120周年記念事業の実施により、旅費交通費や支払手数料などが増加した。給料手当は、本部職員が3名体制から2名が退職、補充をパート職員にしたことにより減少している。

△527万9000円に比べ赤字幅は縮小したが、3年連続の赤字であり、厳しい状況が続いている。縮小の主因は受取寄附金の増加である。昨年度比922万2000円増の2573万6000円になった。創立120周年記念事業募金が大きく、また、過去に特定資産に計上していた寄附を振り替えた額が含まれている。

事業収益は前期比大幅減の479万6000円であるが、晩餐会の入金事務の一部を外部委託し

貸借対照表項目については当期に大きな動きはなかった。特定資産が779万円減少しているが、創立120周年記念事業の実施による取り崩しと、本部職員の退職による退職給付引当資産の取り崩しが大きい。負債の部でも退職給付引当金を543万円取り崩している。

採決の結果、第1号議案および第2号議案は賛成多数で承認された。

◆第3号議案 定款施行細則改正

〔案〕の件

長島常務理事から、本会の会員の入会金を現行2万円から1万円に変更する改正案が提出された。入会金が高いハードルになっている地方支部の状況などの説明がなされた。

採決の結果、第3号議案は賛成多数で承認された。

◆第4号議案 令和6年度役員(監事)の選任(案)の件

長島常務理事から、佐野忠則監事から退任の申し出があったため、清登緑郎会員を監事に選任したい旨の案が提出された。

採決の結果、第4号議案は賛成多数で承認された。

《報告事項》

◆令和6年度事業計画および収支予算の件

長島常務理事から令和6年度事業計画の説明があった。

基本方針としては、策定した理念を踏まえ次の目標が示された。

- ①会員数の維持、②支部活動の活発化、③若手会員や女性会員の活動の活発化、④寄附金と収益事業による収益強化。

南久松常務理事から令和6年度

事業予算の説明があった。

創立120周年記念事業が活発化するため、予算額を前年比35%増と高く設定し、経常収益は1億2459万2000円に増やした。事業管理費と管理費は抑制したが、物価上昇などを見込んだ。結果、経常損益を163万2000円のプラスとした。

◆創立120周年記念事業の報告

猿渡良太郎理事から、創立120周年記念事業として行なわれている「グレート・ヒマラヤ・トラス」、「ヒマラヤキャンプ」、「カナダ・ユース」など各事業の進展具合の報告があり、寄附の依頼があった。

◆新任支部長、退任支部長の紹介

橋本会長から、新任支部長と退任支部長の紹介があった。

新任支部長 千葉支部 三田博
 退任支部長 千葉支部 松田宏

支部 滋賀支部 幣内規男
 支部 山梨支部 古屋寿隆
 支部 京都 滋賀支部 笠谷茂

支部 京都 滋賀支部 笠谷茂

《質疑応答》

これらの議事と報告を受け、会場からは以下の質問があった。



総会会場の模様。会場には各地から84名の会員の出席があった

・ 俵屋守男会員(9742)
流動資産の未収会費は、回収でき
る見込みはあるか？

・ 南久松宏光常務理事

時期の關係で遅く入金するもの
があり、全額が不良債権ではない。

・ 平井拓雄会員(7292)

年次晚餐会の参加費の支払先が
変わったが、何かメリットがあつ
たか？

・ 長島泰博常務理事

外注化により入金確認などの事
務処理が楽になった。元々の目的

は参加費を事業収入に組み入れな
いことにあり、消費税の課税事業
者になるのを防ぎたかった。

・ 平井拓雄会員

本会には知見のある人がいるの
で相談してほしかった。

〈この件に関して理事会は、外注
化することについて財務委員会の
アドバイスにより実施している。〉

・ 野田憲一郎会員(5805)

私は永年会員だが、永年会員か
らいくばくか会費を取ってはどの
だろうか。

・ 橋本しをり会長

貴重な意見をありがとうございます
うございます。理事会で
話し合いたいです。

・ 副島一義会員(1333)

収支予算書内訳表の(2)
経常費用の合計が合つて
いない。

・ 南久松宏光常務理事

間違っているので訂正
する。

・ 日大二高山岳部(9641)

代表・内田栄一

「山岳環境の保全保護」とあるが、「保全」と「保護」
はどのように使い分

けているのか。

・ 永田弘太郎副会長

保護は「人間が一切手を触れず
に守る」、保全は「人間が手を入れ
ながら管理をしていく」と考えて
いる。

・ 俵屋守男会員

記念事業でジョージアに桜を植
えることを進めているが、ジョー
ジアでは6月に「ロシア法」とも呼
ばれる「外国の影響力の透明性
に関する法案」が成立した。こうい
う国に日本山岳会が友好団体を送
るのではないか。

・ 永田弘太郎副会長

ジョージアにはこの法律に反対
する国民も多数いる。ジョージア
との関係は今に始まったものでは
なく、友好の歴史がある。理事会
で検討の上、様子を見ながら進め
たい。

・ 永田弘太郎副会長

ジョージアにはこの法律に反対
する国民も多数いる。ジョージア
との関係は今に始まったものでは
なく、友好の歴史がある。理事会
で検討の上、様子を見ながら進め
たい。

・ 永田弘太郎副会長

ジョージアにはこの法律に反対
する国民も多数いる。ジョージア
との関係は今に始まったものでは
なく、友好の歴史がある。理事会
で検討の上、様子を見ながら進め
たい。

・ 永田弘太郎副会長

《事前の質問》

— 会報「山」に掲載されている
「公務報告」の理事会議事録の詳細
が知りたい—

・ 長島泰博常務理事

理事会の経緯が分かるものをホ
ームページに掲載する予定。加え

て、委員会や支部の動きも見える
ようにしたい。

— 会報の送付に送料を取るかも
しれないとあるが、「山岳」の減ペ
ージや会報「山」の発行回数を減ら
すことも検討してもいいのではな
いか—

・ 長島泰博常務理事

郵送料値上げも予定されている。
これまで支部連絡会議などで話し
合いを続けてきたが、今はデジタ
ル化で乗り切りたい。今後、財政
がさらに圧迫されるようだったら
考えるかもしれない。

・ 長島泰博常務理事

— 次年度の予算を検討する際、
前年度と今年度の予算を比較して
いるが、実績と予算を比較すべき
ではないか—

・ 南久松宏光常務理事

3月中に予算を内閣府に提出す
る必要があるが、決算は4月半ば
以降になり予算対比表が作れない。
また、内閣府への提出も前年度と
今年度の予算を比較するようにな
っている。

・ 南久松宏光常務理事

— 総会ハガキと総会資料は一緒
に送ってほしい。案内はメールで
いいのでは？—

・ 長島泰博常務理事

郵送上の決まりごとがあり、そ



学生部のブンギ遠征隊員も出席、計画が発表された

の関係で分けて送っている。また、総会案内をメールにすることは検討していきたい。

《学生部遠征隊の紹介》

原田智紀理事から、今期予定されているYOUTH CLUB学生部による「日本山岳会学生部ブンギ遠征隊」の紹介があり、寄附の依頼があった。遠征隊についての詳しい説明は、井之上巧磨総隊長（青山学院大学体育会山岳部）から行なわれた。

隊員は尾高源哉登攀隊長（東京大学運動会スキー山岳部）、横道文哉隊員（立教大学体育会山岳部）、中沢将大隊員（立教大学体育会山

岳部）、芦沢太陽隊員（中央大学山岳部）で、うち4人が休学して遠征に臨むという。

ブンギはネパールのペリ・ヒマール山群に属する6524mの未踏峰。2022年にヒマラヤキャンプ隊がトライした山で、南峰西尾根ルートからの挑戦となる。遠征期間は9月5日から11月5日の60日間。

会場からは、登攀ルートや寄附の方法などについて熱心な質問が飛んだ。

《懇親会》

総会終了後、7階のカトレアに会場を移して行なわれた懇親会には、約80名の参加があった。

16時過ぎ、ブンギ峰登山の挨拶のために参加した井之上巧磨さんから学生部の5人の隊員たちの元気な乾杯が始まり、会食と和やかな懇談が続いた。

久々に顔を合わせた会員も多いためか、終始にぎやかに談笑が続いたが、最後に遠方からの参加となった水谷透・関西支部長の手締めに、懇親会は18時に幕を閉じた。

（報告）永田弘太郎・南久松宏光

支部長が代りました

山梨支部長 古屋寿隆さん

四囲を山に囲まれた甲府盆地に生まれ育ち、当時の小・中学校では学校登山も恒例であったので、三ツ峠登山や八ヶ岳などの林間学校もありました。高校では名物行事の強行遠足。甲府から信州・小諸までの105kmを20時間内で歩き通した自信が、大学入学と同時に山を始めるきっかけになりました。主に夏山、冬山の縦走とスキーで、年間100日程度山に入っております。

卒業後郷里に戻り、地元の日岳会に入会、主に岩登りや沢登りなどアルパイン主体の山行を行なっております。20年ほどたったころ、会の先輩が日本山岳会の会員でもあり、本会への入会を勧められて同期2人が入会し、30年が経ちました。



山梨支部長 古屋寿隆さん

山梨の場合は、山岳連盟と日本山岳会山梨支部は設立も同時、同一場所で一心得体、会員も大勢重複しており、山岳連盟の会長は代々日本山岳会から輩出しています。私もかれこれ40年、岳連役員のかたわら支部の役員も20年経験してきました。

本会創立100周年を機に「山の博覧会」を10回、引き続き山の日制定記念事業として「やまなし登山基礎講座」も本年10回目になります。この講座の卒業生をはじめ毎年何人か入会してきており、多種多様な山への志向を持って、意欲的に山に取り組んでおります。

しかしながら、その要望を満たす指導者層が多いわけでありませんが、それぞれ自分の得意分野を担当して、有意義な山岳会活動が実践できるように努力しているのが現状です。私の担当は、ロープワークとレスキュー技術、富士山雪上訓練、岩と氷のクライミング、山梨県山岳レインジャーとしての希少高山植物の調査などです。

支部の運営と活性化、山岳祭の継承と山岳遭難の防止、若手会員を育て、次代に引き継ぐことが私の役目だと思っております。

泰澄祭(5月26日)

令和6年5月26日、晴天の中、恒例の泰澄祭が開催されました。今年には神奈川で開催された全国支部懇談会と重なり、例年出席いただいている坂井山岳祭プロジェクト・リーダーのご出席はかきませんでしたが、100名を超える多くの参加者でにぎわいました。

いつものように越前町小川集落の「行者道」登山口に集合、泰澄ウォークを主宰する泰澄塾の山口塾長の挨拶があったのち、8時に出発しました。天候が良く気温の上



越知山登山口で参加者一同が記念撮影ののち登山開始

福井支部長 森田信人

昇が懸念されましたが、すでに芽を出して茂り始めたブナ林の続く登山道には木漏れ日があふれ、さわやかな5月の風が吹き抜け気持ちの良い登山日和となりました。

たかが600m強の越知山(613m)ですが、「行者道」の名にふさわしく上り下りの続く山道で、累積標高差は1000m程度に達します。ここを約2時間30分で九合目室堂に到着。越知神社に参拝後、三等三角点のある奥の院に参ります。残念ながら白山は雲に包



宮司の祝詞奏上から始まった第36回泰澄祭

まれて見えませんでした。

11時30分から室堂で泰澄祭の始まりです。昨年ご高齢で亡くなられた大谷宮司に代わって今年はその娘さん、女性の宮司による祝詞の奏上の後、玉串奉奠です。支部長の二礼二拍手一礼に合わせて全員で拝礼、その後、支部員と泰澄塾員の数名が玉串をささげました。さらに支部長の挨拶があつてから、お待ちかねの音楽会です。福井のフォルクローレ演奏楽団「ロス・アミーゴス」による演奏が越知山室堂に流れ、昼食をとりながらゆったりとした時間を過ごしました。

12時50分室堂を出発し、展望台、別山を経由して行者道を下り、15時ごろ小川集落へ到着、解散しました。

泰澄祭は全国12(今年から13に増加)の山岳祭の中で唯一存在が疑われ、伝説上の人物ともされている泰澄大師を祀る山岳祭です。しかし大師が開山したとされる寺院は越前五十一寺と数多く、生誕の地に立つといわれる泰澄寺、終焉の地とされる大谷寺をはじめ多くの遺跡や伝承が数多く残っており、地元福井ではその存在を信じる人は少なくありません。

960年ごろに成立したと言われる『泰澄和尚伝記』によれば、泰澄大師は682(白雉³³)年6月11日、越前国麻生津(福井市三十八社)に生まれ、十一面観音の夢のお告げによって越知山に通って修業を積み、717(養老⁵)年、弟子2人を連れて白山に上って千日行を積んだとされています。

白山は、越前から見ると東方に白い連山として天地の境に並び立っています。左から大汝峰・御前峰・別山と連なる姿は仏教思想につながり、それぞれ阿弥陀如来・十一面観音・聖観音に見立てた信仰が始まったものと考えられます。冬の晴天の日には、この越知山山頂からもその神々しい姿を見ることが出来ます。

その泰澄が最初に修行した山、越知山に登り、泰澄の業績に対し尊崇の念を深めようというのが泰澄祭の趣旨です。越知山は、作家・立松和平が登り『百霊峰巡礼』に掲載されています。また、先ごろ放映されたNHKの「日本百低山」でも取り上げられました。これからもこの霊峰越知山の地で、ささやかな催し「泰澄祭」を続けていきたいと思っております。

創立120周年記念事業 ■引き継がれる山岳祭⑦

ウエストン祭(6月1日・2日)

ウエストン祭は毎年6月第1日曜日、上高地ウエストン広場で開催され、前日行なわれる徳本峠記念山行と翌日の碑前祭、そして、碑前祭終了後に関係者が集まって開かれる、カレー1杯の午餐会がセットとなつて行なわれる一連の行事です。

1947(昭和22)年に行なわれたウエストン碑復旧式から始まったウエストン祭は、いろいろな経緯をたどつて現在の形になりました。当初は「ウエストン祭り」「山祭り」などと呼ばれていましたが、第4回・1950(昭和25)年から正式に名称を「ウエストン祭」とし、この年初めて記念参加章「唐松の実」が作られました。第6回には「記念手拭」が作られ、記念参加章と記念手拭をセットとして参加者に実費で頒布されるようになり、現在まで続いています。

第78回となる今年も、記念手拭「キャンブと前穂高」(デザイン:千葉潔会員)と記念ブローチ「シヤクナゲ」(制作:上兼力三)でした。

信濃支部 古幡開太郎

第16回・1962(昭和37)年からは、碑前祭前日に島々から徳本峠を越え上高地に入る記念山行が定着しました。記念講演は小梨平口ツヂで行なわれていましたが、第22回・1968(昭和43)年からウエストン碑前で行なわれるようになり、現在まで続いています。

徳本峠記念山行

台風や大雨の影響で登山道が崩れ、長らく不通が続いていた島々谷登山道は環境省、長野県、松本市が復旧を目指して改修を進めており、今年を通れるかとの期待もありましたが、雪解け水や直前の大雨で登山道が崩れた箇所があったため、今年も明神から徳本峠の往復となりました。

今年も橋本しをり・日本山岳会会長も記念山行に参加され、上高地バスターミナルで出発式を行なった後、横田明会員を山行リーダーとして一行15名は、徳本峠に向かい出発しました。快晴となりましたが、4日前の大雨で六百沢が

荒れ、登山道が流されました。上高地観光旅館組合や自然公園財団、環境省の方々が早朝から復旧工事を行ない、なんとか明神までの登山道が確保されたとのことでした。感謝です。

徳本峠までの道はキビタキやコマドリが鳴き、足元にはサンカヨウをはじめ美しい花を見ながらの楽しい山行であった、と報告がありました。同じ時間に地元、松本市立安曇小学校の児童が明神から徳本峠を目指しました。安曇小学校の児童

が初めて徳本峠を越えたのは第34回・1980(昭和55)年で、「ふるさとの峠を自分の足で確かめたい」との願いから実現した山行でした。以来、現在まで山行は続き、今年も児童と保護者、職員を合わせて六十余名の大部隊となり、元気に徳本峠を往復し、翌日の碑前祭に参加されました。ちなみに、安曇小学校校歌は信濃支部第2代支部長・尾崎喜八の作詞です。

雨の碑前祭

翌6月2日の上高地は、朝から



穂高連峰を背景に河童橋のたもとに設けられた案内カウンター

雨が静かに降っていました。雨の碑前祭は過去2回、第26回(1972年)と第49回(1955年)で、今回で3回目となりました。雨でも碑前祭はウエストン広場で開催するのが習わしとなつていて、200人を超える参加者を前に定刻10時、開会を告げました。

日本山岳会初代会長・小島鳥水のお孫さんご家族や、副会長桐生恒治会員を含め全国から登山者が集まりました。冒頭、ウエストン祭を主管する信濃支部・東英樹支部長は「雨の中、こんなに大勢の皆

さんに集まっていただけたのは、ウエストン師のなせる技です」と挨拶されました。安曇小学校4年生・井口優里さんと大城胡桃さんによるウエストン碑への献花に続き、安曇小学校児童と西岡菊恵会員を指揮者に、元エーデルワイスクラブの6名により「ウエストン祭の歌」が献じられました。

物故者への黙祷の後、挨拶に立った橋本しをり会長は、「ウォルター・ウエストンは、日本の近代登山の父と呼ばれ、明治から大正時代にかけて日本の山々探検し、その美しさを世界に紹介しました。特に北アルプスや上高地の魅力を力説し、多くの人々に自然の美しさや登山の楽しさを教えた偉大な登山家です」と紹介されました。松本市長・臥雲義尚氏のメッセージ

に続き、尾崎喜八が詠んだ詩「上高地の宮様 秩父宮勢津子妃殿下が参



傘の下で講演をする高橋通子会員

倉登喜子会員が率いるエーデルワイスクラブ14名が、立教大学の平野修さんの指揮で「歓びの歌」を歌いました。このとき始まったエーデルワイスクラブによる合唱は恒例となり、第61回・2006

地での朝の感慨」を植松晃岳会員が朗読しました。この詩は60年前の第17回(1963年)6月2日の朝、上高地で詠んだ詩です。朗読を始める直前にオオルリが鳴きまじった。鳥に詳しい植松会員は、上高地は60年間で変わったが、オオルリが綺麗な声で鳴き、花たちが美しく咲く姿は変わっていない、と話しました。

式典は、安曇小学校児童と元エーデルワイスクラブ員の合唱で閉められました。雨の中、朝から合唱の練習をしていた児童たちは、寒さをこらえながら合唱していたようです。終わった後口々に「寒かった」と話していました。

エーデルワイスクラブが初めてウエストン祭で歌を歌ったのは第11回・1957(昭和32)年で、山

(平成18)年まで続きました。今回18年ぶりに参加し歌声を聴かせていただいた会員の1人から後日、メールをいただきました。「我が青春の思い出の世界に久しぶりに戻れ、5歳くらい若返って帰って来ました」とありました。

記念講演

記念講演は、高橋(今井)通子・永年会員が「これまでの経験から今後の山を考える」と題し講演されました。高橋会員は東京都出身の泌尿器科医で、会社の代表を務めながら日本山岳ガイド協会顧問など、山関係の仕事が続けられています。東京女子医科大学山岳部を経て1967年、女性パーティ

として初めてマッターホルン北壁を登攀。その後アイガー北壁、グランド・ジョラス北壁を次々と登攀し、女性として世界初の三大北壁登攀者となり、第1回「森田たまパイオニア賞」を受賞されました。

講演では、古い時代から近代登山までの日本とヨーロッパの登山の歴史を話された後、ザイルのトップで登攀したいと思っていたが、女性はいつも男性の後から登攀することが多く、緊張感がないため

女性だけで登攀することを思いつき北壁に挑んだ、とご自身の登山歴について話されました。

そのなかでご主人のダンブさん(高橋和之氏)とグラント・ジョラスの頂上で結婚式を挙げ、駆け落ちではなく、駆け寄り結婚と呼ばれた、と話されたのが印象的でした。自分たちの楽しみを考えて登る登山というのがこれからの登山だ、と話され、講演を終わりました。

高橋会員には雨の中、傘の下で講演していただきましたが、終わるころには雨も上がりました。記念講演の後、参加者全員で「今日の日はさようなら」を歌い、ウエストン祭の幕を閉じました。

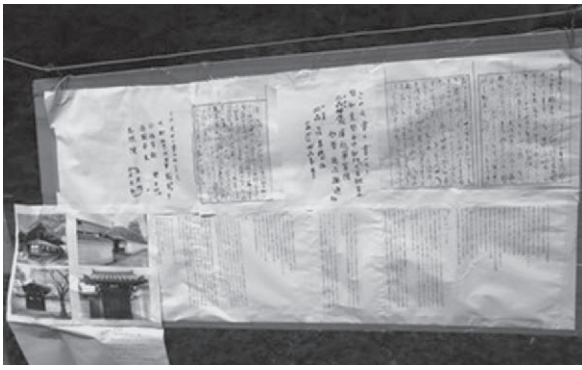
来年、79回ウエストン祭は5月31日・6月1日の2日間、上高地で開催し、英国大使をお迎えする計画が進んでいます。また、ウエストン祭を挟んだ約1ヶ月間、上高地インフォメーションセンター2階で、ウォルター・ウエストン師とウエストン祭の展示をする予定です。ウエストン祭の記念品や歴史資料を展示しますので、ご期待ください。

(ウエストン祭実行委員長)

播隆祭(6月2日)

第39回播隆祭が、富山市河内地区内、播隆の生家跡にある「播隆上人顕頌碑」前で行なわれた。今年には思わぬ不測の事態により、異例の幕開けとなった。支部長の罹患欠席、会場に通じる熊野川林道が落石のため通行停止、そして、式典中の大雨が重なったが、関係者の適切な対応と参加者の協力によって無事実施されたことに感謝したい。

林道については、道路管理者に



解読された「一心寺古文書」などが展示された

富山支部 金尾誠一

連絡を取り、迂回路となる小口川林道が、多少の落石はあるものの通行は可能ということを確認し、参加者に連絡して無事会場に参集することができた。式典には、古文書のパネルなどが展示された。また、播隆ゆかりの遺品としては、生家の中村家で仏事に使用されていた菊と葵の御紋の入った幕が飾られた。参加者は、「引き継がれる山岳祭プロジェクト」の坂井リーダー、富山支部会員8名、石川支部会員2名、「生家の会」会員8名、一般参加者2名の合計21名であった。

式典は、予定から30分遅れの9時30分から開始された。その時点では空は薄曇りであったが、降雨はなかった。最初に松本顧問が挨拶し、本部および石川支部からの参加に感謝、「播隆上人顕頌碑」は、富山支部が設立35周年を記念して、昭和58(1983)年に建立されたこと、諸先輩方の播隆研究と敬慕の心は以来、連綿と現在に引き継がれていることを述べられた。

次に、坂井リーダーからは、「山岳祭」は全国12支部で11人を顕彰していること、次年度には新しいパンフレットと冊子が作成されること、7月には越後支部の「高頭祭」が実施されることが紹介された。今年の高頭祭は「国際山岳平和祭」との併催で、アジア山岳連盟からも多くの参加が予定されており、ぜひ参加を、と呼び掛けられた。また、ご自身は今回の播隆祭参加によって、全山岳祭に参加を果たされたそうである。

石川支部の樽矢支部長は、今回初めて参加できたこと、石川支部は「久弥祭」および富士写ヶ岳登山を行なっており、「今後も北陸の支部同士仲良くやりましょう」と結ばれた。

続いて参加者全員による焼香となったが、このころから雨が降り出し、次第に大降りになっていった。金尾支部会員からは研究組織「ネットワーク播隆」の紹介があり、播隆の足跡として、昨年の笠ヶ岳再興、再来年の槍ヶ岳の第1回偵察登山が200年目の節目に当たることが紹介された。また、播隆の独特な筆跡の「二八字名号」と播隆「二枚起請文」が参加者に配布された。

最後に生家の会代表の大作一男さんが挨拶された。氏は、生家の会のまとめ役として第1回から参加されており、播隆祭にはなくてはならないお方であるが、高齢のため今年限りで世話役を退きたいと述べられた。長年のご尽力に感謝したい。

昨年引き続き「一心寺古文書」の解読結果が説明された。これは、大作さんの熱意ある解読依頼に応じられた、立命館大学の真下教授たちの成果である。今年も、播隆に帰依した朝廷ゆかりの信者の書面や川内道場額の譲り状などが紹介された。雨音で説明の声も途切れがちなか中の、大作さんの最後の熱い説明であった。

記念撮影後の高頭山記念登山は、残念ながら強雨のため中止となった。全員、小口川林道から車で帰って行く中、一般参加の長野から来られた中村さんは、通行止めとなった地点まで淡々と雨の中を独り歩いて行かれた。播隆を彷彿とさせる姿であった。

そのような次第で、今年の播隆祭は深く思い出に残るものであった。



プロ冒険家―阿部雅龍の逝去を悼む

中村 真

今年52歳を迎えた私が、人生で初めて「プロ冒険家」を名乗る男に出会ったのは、今から9年前の2015年だったと記憶している。そのころ、その男はまだ「プロ」を名乗っておらず、「夢を追う男」として自身の活動を表現し、すでに南米大陸自転車横断やアマゾンの川下り、北極圏エリアでの単独徒歩などの冒険を成し遂げていた。

国内にいると、どうしても海外



阿部 雅龍 (あべ・まさたつ)

会員番号16728

- 1982年 秋田市に生まれる
- 2010年 米国のコンチネンタル・ディバイド・トレイル単独踏破
- 2011年 カナダのグレイト・ディバイド・トレイル単独踏破
- 2012年 ユーコン川単独カヌー行／アマゾン川単独いかだ下り
- 2014～16年 カナダやグリーンランドの北極圏単独徒歩
- 2019年 日本人初メスナー・ルートから単独徒歩で南極点到達
- 2021年 大和雪原から南極点に向け単独徒歩に挑戦するも断念
- 2023年 植村直己冒険賞受賞
- 2024年3月27日 逝去、享年41

の情報に疎くなってしまう。世界で活躍する日本人の情報は、メディアのフィルターを通して報じられる一部のものしか目にしないとはいえ、その男と初めて出会い、彼の話聞いたときの印象は、こんな日本人が存在するのか?! という至極単純だが強烈なインパクトがあったことを覚えている。

男の名前は阿部雅龍。人力車夫のいでたちでさっそうと現われた「夢を追う男」との出会いの瞬間だった。私は阿部と出会ってから、その無謀とも思える彼の挑戦の話に

すっかり魅了され、自分ができる限りの応援をしようと心に決めた。そして、その後のサポート体制を仲間とつくってきた。

110年以上前の日本を代表する偉人・白瀬轟については、恥ずかしながら名前と存在しか知らなかった私は、阿部との出会いから一気に白瀬の生涯を知ることとなる。阿部が話す白瀬の物語を聞き続けてきた私にとっては、まるでの時代の白瀬が生き返ってきたかのような時間が流れていた。

しかし、110年前に達成し得なかった白瀬ルート（白瀬が目指したであろう南極点までのルートに阿部が名付けた名称）への想いを、同郷の冒険家がつなぐという壮大な夢はすぐ素敵で、魅力的なテーマでありながら、チャレンジに必要な冒険資金もまた目玉が飛び出るほどの金額であった。

阿部の白瀬ルート・チャレンジに対する支援が、オセロ盤のように黒から白へと一気に好転したのは、2018年から19年にかけて挑戦したメスナー・ルートだ。917・7kmのこのルートでの、単独徒歩による日本人初の南極点到達成功である。

これまで興味を示さなかった多くのメディアや企業の担当者から連絡をいただくこととなった。だからといって資金調達が楽になったわけではなかったが、冒険家・阿部雅龍の存在を多くの方が知ることとなり、講演の依頼やイベント出演の機会にも恵まれていった。そして2023年、白瀬ルートに向けての冒険資金も目処がつき、科学的なトレーニングも積極的に取り入れ、チャレンジ実行に向けての全ての準備が整った8月。訪れた悪夢は、皆さんの知るとおりである。

阿部と出会いおよそ10年。彼の挑戦に伴走してきた間に「夢を追う男」は「プロ冒険家」を名乗ることとなった。この「プロ冒険家」という肩書を自ら掲げて生きていく男を、私は阿部しか知らない。

私は、これからの私の人生において、プロ冒険家・阿部雅龍の名を語り続けていく。語り続ける人間がいる限りその人は何度も生まれ変わり、いつまでも生き続けていくのだ、と彼が教えてくれたのだから……。

(一般社団法人・人力チャレンジ 応援部代表理事)

連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

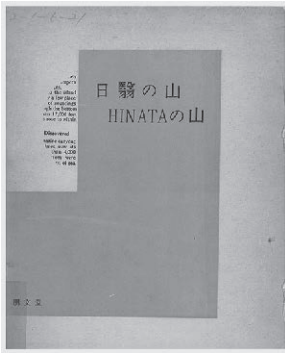
②『日翳の山 ひなたの山』

(上田哲農著・朋文堂)

荒井正人

山の画文集と言えば、足立源一郎や坂本直行、辻まこと、あるいは畦地梅太郎や吉田博などが思い浮かぶ。絵画は油絵から水彩、版画など手法は様々だが、作者の特徴というか、個性が豊かに表われる。一方、文章は画文集に客観的な記録や報告といったものはそぐわない。おのずと紀行や随想ということになるだろう。そして、そのどちらもが読者の心をつつものとなったとき、画文集としての名著となる。

上田哲農は、絵の分野で言えば一流の水彩画家である。文化学院美術科を卒業し、水彩連盟展や一



昭和33 (1958)年初版発行

水会展で受賞、昭和26 (1951)年、40歳で日展の特選を受け、のちに会員となっている。何しろ『水彩画教室』という本を出しているほどである。

一方、山登りはいうと、この分野でも超一流と言わなければならない。40歳で日本登高会の創立に参加し、谷川岳などの困難なルート開拓を行なっている。のちに第2次RCCの結成に加わり、1966年にはソ連・カフカズ、69年にはパミール高原の遠征隊長を務めている。筆者がこの『日翳の山 ひなたの山』と『山とある日』『きのうの山 きょうの山』の中公文庫を手にしたのは随分前のことであるが、今回改めて読んでみると、実に新鮮に感じる。60年も前の出版であるというのに……。

この間の自分の山行などの影響もあるだろうが、単に雪山や岩登りばかりでなく、「雨の丹沢奥山」

や「利根川遊記」といった文章に惹かれる。もちろん白馬岳・主稜を取り上げた「ある登攀」は、よく知られた一文である。挿絵のような、シンプルながら文とマッチした絵は、上田ワールドとも言うべきもので魅了される。

モノクロであるが、今回これを書くに当たって、図書室で『上田哲農の山』(74年・山と溪谷社)も読んでところ、編集の安川茂雄氏のとがきに『山とある日』には百冊の限定本が刊行されているが、その一冊を上田さんから拝領している。全ページの挿絵に画伯が水彩で(むろん手書きで)色を入れて下さったのである。『とある。どんな色を施したのであろうか。見てみたいものだ。』

さて「日翳の山 ひなたの山」とはどういう意味であろうか。最後に「跋―上―き父上へ―」という文章があり、そこにヒントがある。「行はひなたの山」「思案は日翳の山」と考えているのである。別の言葉では、「ひなたの山は写実」で「日翳の山は抽象」と表現し、『どうやら、一生を通じて「山」を離れてはものを考えられないほどの生涯にあって、山にある日は「ひなたの

山」、街にある日は「日翳の山」、そうしてこの写実と抽象の二つをらせん形によじ登ることによって、更にその頂きに、毅然と光っている形而上の真の「山」に到達するルートを発見したいとこいねがっているともいえます。』と書いている。

山は取るに足らない草山でもあつても、とも書いている。ちよつと難しい。「きのうの山 きょうの山」に「塩川温泉」という文がある。筆者がよく行くエリアだけに親近感を持つが、こうした登攀とはかけ離れた話や、詩とも言える短文など、実に多彩である。

絵も山道具を描いたものは写実的で、ミロを連想させるような抽象的なものもあれば、雪山は足跡が印象的である。ハードな山に登りながら、こうした画文を遺した上田哲農。59歳での死は早過ぎた。少しずつ味わって読みたいものだ。1冊だけでなく前記3冊と、できれば『上田哲農の山』も併せて読むことを勧めたい。なお、新刊としてヤマケイ文庫クラシックス『新編 上田哲農の山』(2023年初版発行、税込み2200円)が発刊された。

(図書委員会委員)

(22) 『高熱隧道』 (吉村昭著・新潮社)

節田重節

登山や登山者がテーマとなる、いわゆる山の名著ではないが、北アルプスの山峡で展開された、苛酷な大自然とそれに挑む人間の闘いを描いたドキュメンタリー・タッチの小説である。

著者は『戦艦武蔵』や『ふおん・しいほるとの娘』『破獄』『罷嵐』など記録文学の泰斗、吉村昭で、時代は太平洋戦争直前、舞台は黒部川・下廊下。現在も我々登山者が利用している樺平〜志合谷〜折尾谷〜阿曾原谷〜仙人谷と続く、黒部川左岸にうがたれた水平歩道(旧・日電歩道)と、その山腹内に掘削された上部軌道と水路トンネルの工事を巡る壮絶なドラマが生々しく綴られている。

日本電力(株)が黒部第三発電所の建設工事に着手したのは昭和11



昭和42 (1967)年初版発行

(1936)年8月。仙人谷にダムを構築、その水を下流に送って樺平の発電所で発電するための水路トンネルと、工事用資材運搬のためのトンネル掘削を進める計画だった。ところが、阿曾原谷〜仙人谷間の工区が高熱の温泉湧出地帯にぶつかったことにより、言語に絶する難工事となった。

掘削の最前線の「切端」は熱水や蒸気との闘いで正に修羅場と化した。しかも発破用ダイナマイトの使用は、火薬類取締法で40度が限界と決められていたが、工事はこれを無視して進められた。黒部川の冷水を放水して岩盤を冷やし、その放水係をまた放水で冷やす。ダイナマイトを絶縁体の竹筒に入れて岩盤にセットするなど、あらゆる対策が取られたが、岩盤の最高温度が166度にも達し、とうとうダイナマイトが自然発火、火薬係4名と、放水する「かけ屋」4名が犠牲となった。

それでも国家非常時の下、工事は進められたが、またまた自然の猛威が工事現場を襲う。昭和13年

冬、鉄筋コンクリート5階建ての志合谷工事宿舎が、「泡雪崩」で飛ばされ、一瞬にして84名の命が奪われたのである。泡雪崩とは、現代では「煙型乾雪表層雪崩」と呼ばれているが、新雪の雪の粒と粒の間の空気が異常なほど圧縮された状態で落下する雪崩で、障害物に激突すると、その圧縮された空気が大爆発を起こし、爆風は音速の3倍、毎秒1000m以上にもなるといふ。なんと宿舎の建物は2階以上が580mも吹き飛ばされ、黒部川右岸の奥鐘山の崖壁にたたき付けられたのである。水平歩道で志合谷を渡るとき谷側を見下ろすと、土台だけとなった宿舎の残骸が見付けられるだろう。

これら2つの大惨事に見舞われながらも、黒部第三発電所建設の全工事は昭和15年11月に完成する。高熱隧道を完成させた原動力は国家の軍事目的であったが、著者が書きたかったテーマは、自然と人間の闘いだっただけであろう。歴史的な事実や証言の徹底的な取材と検証、調査を基に、リアルな筆致で描かれる吉村文学に、読者は引き込まれていくに違いない。

私は昭和38(1963)年冬にこ

の高熱隧道を通っている。入山は宇奈月から黒部峡谷鉄道で樺平に入り、北仙人尾根から極地法で剣岳に登頂。下山後は樺平から豎坑(地中のエレベーター)で200m上がり、さらに木製の貨車を連ねた上部軌道で仙人ダムまで運んでもらった。ダムが近付くと車内に猛烈な勢いで蒸気が充満してきた。それが最大の難工事となった高熱隧道の現場だったのだ。著者も「あ」とがき」で、《しばらく進むと妙な熱さが私の体を包みこみ、かたく閉ざされた扉のすき間からも湯気が入りはじめてきた。(略) 私はいかにこの隧道内に異常事態が起っているのではないかと思つた。》と記している。

本書が出版されたのは昭和42(1967)年だが、私は4年前にその現場を体験しているだけに、早速買い込んでむさぼり読んだことを覚えている。近く「黒部宇奈月キャニオンルート」が開放される予定だが、豎坑や高熱隧道も通るので、小説の舞台をリアルで体験してみたいかがだろう。

文庫版は新潮文庫(1975年初版発行、税込み649円)で読むことができる。(図書委員会)

山 | N — | — | S — | — S 東北 西南

.....
会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

武田久吉—本会を担った 先人を知る 山口耀久と の交流 小原 茂延

今年1月10日、山口耀久あきひろさんが他界された。『山と溪谷』誌3月号に三宅修氏が追悼文を書かれていた。山口さんは若い時代、富士見高原サナトリウムで療養生活を送っていた、その折に尾崎喜八と出会い薫陶を受けている。その後、著書『北八ッ彷徨』で詩情豊かな名文を綴る一方で、『独標登高会』を設立して尖鋭的な登山をしたことでも知られる。

その山口さんが著書『アルプの時代』で、「……私にはその頃、先生と呼んだ方が二人いる。一人は尾崎喜八先生であり、もう一方が武田久吉先生である……」と書いている。その武田久吉との初対面のエピソードが強烈だったので、

その後、講演会などで尋ねてみたが、意外と知られていないようだ。それは、山口さんが「岳人友の会」の創立会員の要請を受け、武田さんの講話を伺おうということになり、富士見町のお宅を訪ねたとき、着物姿で応対に出た先生に向かつて、「武田先生でしようか？」と口にしたのがまずかった。

「この家に武田久吉以外の人間がいると思うかね」という言葉が返ってきたそうで、後はしどろもどろで、突然に伺った失礼をお詫びし、今日もう一度お願いに来るお許しを得て、2時間余りを置いて再度同行者と訪問し、申し出を了諾していただき、講話の当日は日光や尾瀬の手付かずの時代の回顧談を聴かせていただいた。これが縁となつて毎年、スライドを映しながら講話をお聴きするのが恒例となつた由である。武田博士の厳しい一面と、相手に見込みあると

認めてからの親身な指導鞭撻を受けた方は多く、科学者としての正確な事実を重んじる一方で、情実を弁わづらえた方であつたと評されている。

1905(明治38)年10月14日に本会の設立を見るのであるが、その年7～8月に武田久吉は日光の金精峠越えで尾瀬に初めて入り、豊富な植物相に目を眩くらり採集に努めている。同行は日本博物学同志会の早川氏である(同行を梅澤親光としている本があるが、誤りで梅澤は日光まで同行)。その尾瀬行の紀行文末で、「その間に、東京では山岳会結成の協議が進行中であり、中心となる日本博物学同志会の幹部と、経済的後援者である高頭氏との交渉や、会の規模なども重要な問題であつた。それで一同は、私の帰京を、鶴首かくしゅして待っていたわけである。(以下略)」といみじくも書いてるように、この時点で山岳会の立ち上げのイニシアチブは博物学同志会にあつたようである、同会の取りまとめは武田久吉がリードしていたことが窺える。小島鳥水が博物学同志会に入会したことも、これを裏付ける証左であろう。後に武田が「軒先を貸して

母屋を取られた」と述懐したのもうなずけるわけだが、発起人のいわゆる7人の侍のうち、日本博物学同志会のメンバーが4人、城数馬も山草会での付き合いがあつた関係で、武田が鳥水の意を受けて招聘した経緯を考えれば、山岳会の母体は日本博物学同志会であつたことは否めないところで、同会の支会として発足したわけである。

来年は本会の創立120周年を迎えるに当たり、その黎明期から会を担つてきた先人たちを俯瞰的に捉えてみると、武田久吉はその源流から小島鳥水とともにあり、戦後間もなく長逝された小島鳥水の後も、長く本会のご意見番として、またその後、新たな仕組みとなつた日本山岳協会の初代会長として日本の山岳界を束ねた功績は甚だはなは大きいものといえる。

先に述べた山口耀久は前掲書『アルプの時代』の中で、こう述べている。「武田さんは学問上の業績が偉大であつたにもかかわらず、この国の学界では不当に不遇であつたように思われてならない。」

「わたしには、本格的な評伝としての『武田久吉伝』がいまだに刊行されていないのは、この国の登山界

の怠慢のように思えてならない。」と核心をついている。
この春、日光浄光寺に眠る武田久吉の墓前(三田の薬王寺と分骨)

活動報告

科学委員会

令和6年度探索山行―山梨県小菅村における地方創生、登山道管理、古道復活の取り組みを学ぶ―

科学委員会の探索山行は、6月8日(土)〜9日(日)に山梨県小菅村で開催され、松姫峠から山の神、山沢入りのヌタ、鶴寝山(1368m)への登山および登山道管理状況の見学、道の駅こすげ周辺での地方創生の取り組みに関する実地見学・意見交換などが行なわれた。この探索山行は、令和5年12月23日に開催された科学委員会主催のフォーラム「登山を楽しくする

に参ったが、桜花咲きしきる中、なぜか些か寂しい思いが去来するのであった。
(資料映像委員/埼玉支部員)

山岳会の同好会の
日本各委員会の活動報告です。

科学(XII)で報告された「これいいのか登山道―登山道のあるべき姿と今後を考える―」を基に企画されたものである。参加者は一般参加者2名、JAC会員1名、科学委員会から8名の計11名であった。登山道案内と地方創生活動を紹介する講師は、小菅村で活動されている(株)トリ・トリー代表取締役の大野航輔氏に依頼した。
6月8日、JR青梅駅に集合。貸切バスで奥多摩湖経由小菅村に向けて9時に出発した。道の駅こすげに到着後、講師の大野氏と今後スケジュールなどを打ち合わせた。原生林トレッキングが鶴寝山周辺の東京都の水源地で行なわれ



原生林のトレッキング。山沢入りのヌタにて

るためバスで松姫峠に行く。武田信玄の娘、松姫の逃避行伝説が残る松姫峠からは、かろうじて富士山が確認できた。鶴寝山への巻き道をたどり、大山祇命を祭った「山の神」で休憩。道の駅こすげ方面に下る尾根(現在は廃道の古道)に、マウンテンバイクのコース設置を検討しているとのことである。鶴寝山の北側の巻き道は、ブナの巨木など広葉樹の自然林が残り、立派な木製の道標が設置され、よく整備された歩きやすい登山道であった。「ブナ枯れ」や木々の説明などを聞きながら、また、野鳥の

鳴き声やセミの声に送られながら、フタリシズカが群生する静寂な道を歩く。目的地である「山沢入りのヌタ」で昼食後、帰路は日向遊歩道をとる。鶴寝山山頂を経由して、松姫峠に戻った。バスで小菅村の廣瀬屋旅館に着く。

翌9日、宿で大野氏の「多摩源流小菅村の地方創生への取り組み」の講演および意見交換を行なう。バスで道の駅こすげに移動し、大野氏の案内で、間伐材を利用した薪ボイラーの現状、タイニーハウスこすげ、フォレストアドベンチャーこすげの利用状況、源流の森再生PJ(土中環境改善)に関する詳細な説明、空間利用の試みとして木製バンクによるマウンテンバイクコース設置状況、木材加工場などを見学した。

これら地方創生の活動は、地域おこし協力隊など若者たちの活動の場となっている。道の駅こすげの源流レストランで昼食。雨乞いの滝を見学後、バスで箭弓神社に移動し、小菅養魚場および箭弓神社を見学する。鳥居の扁額は「箭弓三所大明神」と記され、神仏習合の名残が見られる。説明板には小菅丹波の総社で、疫病退散のための

獅子舞が行なわれる、と記されていた。ここから史跡小菅城址天神山に登ると、堀切や曲輪の跡が確認できる。小菅城は室町初期に武田家の家臣であった藤原朝臣小菅遠江守信景が築城したと記されている。ここで探索山行の全日程が終了し、解散となる。

小菅村における木材・間伐材および山林の空間利用、登山道整備、古道活用など地域おこし協力隊と協力して地方創生が広範囲にわたる精神的に実施されている状況を確認することができ、貴重で有意義な探索山行であった。

(科学委員会委員長 松本敏夫)

図書委員会

山岳図書を語る夕べ

5月22日「山岳図書を語る夕べ」がルームにて開催された。今回は著名な詩人で、本会の会員でもあった尾崎喜八のお孫さんに当たった石黒敦彦氏より「21世紀の尾崎喜八」と題して講演いただいた。尾崎は本会に1933年2月に入会しており、「山の詩人」として活躍してきた。本会では「ウェストン祭で」の詩の朗読」というイメージが強

い尾崎であるが、詩人としてだけでなく科学者、そして雲の写真を撮る写真家としての顔もあり、講師の石黒氏は近親者という立場から尾崎の知られざる姿を語られた。

まず、交友関係とそれが尾崎の詩にもたらした影響について興味深いお話を伺うことができた。交流があった主な人物として高村光太郎、串田孫一、武田久吉(日本山岳会創立者の一員、日本山岳会第6代会長)といった各界の著名人の名が挙がった。また、杉並区内での人のつながりがあったこと、関東大震災を機に人の移動があったことなど、尾崎の周りの環境がいかなるものであったかなど、当時の尾崎の私生活が偲ばれた。加えて寺田寅彦との交流があり、その影響か文学と科学の融合が尾崎の作品に見られること。具体例としては『美ヶ原溶岩台地』という作品の中で「溶岩台地」という言葉が入ってきたことなどが紹介された。これは初期の博物学的なアプローチの中で尾崎の文学が育くまれていったことの証と言えるだろう。また、山の歩き方にもそれが表われていることにも触れられた。中央線・上野原駅周辺の低山をゆつ

寄附金および助成金などの 受入報告(6月まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
トヨタ東京自動車大 学校	50	高尾の森づくりの会 活動への指定寄附金
三井住友信託銀行	200	高尾の森づくりの会 活動への指定寄附金
グローリーエンジニ アリング(株)	50	高尾の森づくりの会 活動への指定寄附金
富士電機(株)	50	高尾の森づくりの会 活動への指定寄附金
電源開発(株)	100	高尾の森づくりの会 活動への指定寄附金
(株)エリオニクス	100	高尾の森づくりの会 活動への指定寄附金
(株)トヨタカスタマ イジング&ディベロッ プメント	150	高尾の森づくりの会 活動への指定寄附金
高尾登山鉄道(株)	150	高尾の森づくりの会 活動への指定寄附金
伊藤ハム米久ホール ディングス(株)	50	高尾の森づくりの会 活動への指定寄附金
ささえあホールディ ング(株)	50	高尾の森づくりの会 活動への指定寄附金
コニカミノルタ(株)	200	高尾の森づくりの会 活動への指定寄附金

くり歩く様を「低山徘徊」と表現されたのも、その場所の植生をじっくりと観察する目があったゆえだったようだ。

講師の石黒氏はさほど山には縁がなかったそうだが、それでも若いころに尾崎とともに八ヶ岳や乗鞍岳を歩いた思い出を語ってくださった。また、尾崎の孫として、作品をもっと多くの人に触れてもらいたいと願い、著作権をオープンにしたいと考えられている。「尾崎喜八」で動画検索すると多数の合唱などの動画がヒットするそう

だ。関心のある方は検索してみよう。また私生活では、セルフタイマーでの集合写真撮影に凝っていたこと、妻(石黒氏から見たら祖母)より背が低いことを悔しがって、一段上に立って写真に写っていたことなど、尾崎の作品からは直接見えてこない楽しいお話もあった。当日会場に足を運んだ多くの会員は、ここでしか知ることのできな

いほのぼのとした家庭生活も伺うことができ、その後の歓談の席にもご一緒してくださった石黒氏といっそうの交流を持つことができ、とても良い講演会だった。

(床田真理)

緑爽会

「アルバータ峰」講演会を開催

さる5月9日、ルーム104号にて緑爽会主催の「アルバータ峰」をテーマにした講演会が開かれた。芳賀孝郎会員から「アルバータ峰登頂の歴史と伝説のピッケルについて」と題してお話をいただき、このピッケルの話を基に絵本を創作された、奥様の芳賀淳子会員による紙芝居「アルバータ山のピッケルものがたり」が上演された。

講演会には、初登頂から75周年に当たる2000年に開かれた「アルバータ・プロジェクト」に参



紙芝居を上演する芳賀淳子会員

加された、カナダ山岳会会員でもある益田幸郎会員をはじめとして、47名の参加があった。

芳賀孝郎会員は、「私は前座だから」と笑いを誘いながらも、初登頂以降の詳細な資料を基に、アルバータ峰のことや、ピッケルの不思議な運命について話された。また、「友好のピッケル」とのタイトルで、中学校の道徳の教科書にこの話が掲載されたことも紹介された。会場には、同じくプロジェクトに参加された芳野菊子会員もおられ、当時、教科書編集に携わっていたことから、この話を後世に伝えたいと考え、国際理解・協力を学ぶ資料として掲載した経緯を話していただいた。

その数奇な運命のピッケルの紙芝居上演に先立って、石川支部会員で、「深田久弥を愛する会」の会員でもある大庭保夫会員から、紙芝居が生まれた経緯が披露された。大庭会員は北海道支部会友ということもあって奥様と芳賀会員宅を訪れたときに、絵本を見た奥様が紙芝居にしたらいいのでは？ と思いつかれたそう。上演では、芳賀孝郎会員が、読み上げる奥様をサポートされる場面もあって、聴

衆は綺麗な絵を見つめつつ、語り

に耳を傾けていた。最後の質問コーナーでは吉川正幸会員から以下のような紹介があった。「日本山岳会の有志で、アルバータ峰登頂100周年に当たる2025年夏にカナダへの記念ツアーを計画しています。アルバータ峰初登頂日が7月21日なので、来年のその日に合わせて、ピッケ

ルが保管されているジャスパール・イエローハット博物館では記念イベントを企画しています。このイベントに参加するため、7月17日から8日間の旅行を計画しているので10月に旅行説明会を開催する予定です。その予告は会報「山」で告知とのこと、興味のある方は参加されてはいかがでしょうか。

(荒井正人)

図書紹介

泉康子著
松本雪
天災か人災か？
崩裁判の真実



2023年4月
言視社
A5判 328頁
2500円＋税

本書は、『いまだ下山せず』の著者、泉靖子氏が、今から34年前に

起きた雪崩事故を巡る法廷論争の経緯を追いつけたドキュメンタリーである。最愛の息子を失った母親と、ともに闘った弁護士、それを支援する方々の5年間でドラマチックに展開していく。泉氏のテノポの良い文章に引きずり込まれた。すでに勝訴した裁判を巡る話がなぜ今、という疑問には文末で答えたい。

事故は1989年3月に五童岳遠見尾根で起きた。長野県の山岳

総合センターが主催し、県立高校山岳部の生徒と先生を対象とした雪山研修会で雪崩が発生したのだ。そこで若い高校教師が亡くなった。将来を嘱望されていた酒井耕。息子を亡くした母親、三重は、翌日に現地へ入った雪山経験の豊富な西牧康（日本山岳会信濃支部。雪崩に4回遭遇している）の推察などから、雪崩は自然発生ではないのではないかと考え、その真相を究明したいと思う。そのことが先々の同様の雪崩事故を防止することになるとの思いもあった。そこで松本市の中島嘉尚弁護士に相談し、県を相手に提訴するに至る。

しかし、県の言い分は「雪崩は自然災害」の一点張り。教職の身にある者としては昇進や教頭、校長への道に影響が出ることを恐れるあまり、頑にその態度を固持する。だが、勤労者山岳連盟での雪山講習会の責任者である中山健生を知り、雪崩博士の新田隆三（現姓・若林）の知遇を得たことで、俄然展開が変わる。中島弁護士は、山に関しては全くの素人であるが、大事にしたのは「科学的な裏付け」と「現場主義」。雪崩を科学的に学び、その発生メカニズム「弱層に刺激を

与えると雪崩が発生する」ことに力を得た。

加えて、前例のないことで、裁判官を現場に連れ出すのだ。雪崩現場が法廷となったようなものである。この展開はドラマを見ていようである。こうした取り組みが功を奏し、結果的に勝訴するが、こんな事故は息子だけにしてもらいたいとの母親、三重の思いとは裏腹に、その28年後、那須岳で再び若い命が奪われた。

著者はこの原稿を書きかけていたが周辺にいろいろな事情があったり頓挫していた。それでも再び雪崩事故が起り、その報告を読むと人的刺激の検証がないことに愕然とし、過去の教訓が活かされていないと、書くことを決断したというのである。『いまだ下山せず』も雪崩遭難事故のドキュメントである。こうした雪崩事故はもう起こしてはいけない。そんな著者の思いが伝わってくる。

（荒井正人）



ライチヨウ、翔んだ。

近藤幸夫著



2024年4月
集英社インターナショナル
四六判 280円
2000円＋税

「絶滅したはずの山域に現れた一羽のライチヨウ。それが奇跡の復活プロジェクトの始まりだった。」

と本書の帯にあるように、中央アルプスにおけるライチヨウの「復活作戦」と、稀代の鳥類学者の執念とも言える活動を追った元新聞記者のルポルタージュ。

それは2018年7月20日、木曾駒ヶ岳頂上直下にある頂上木曾小屋付近で登山者が1羽のライチヨウを撮影、その写真を地元紙・信濃毎日新聞に持ち込んだことから始まった。写っていたのはメスで、以後「飛来メス」と呼ばれることになる。中アでの最後のライチヨウ目撃例は半世紀も前の1969年で、それ以降、中アでは確認されていない。

当時、ライチヨウが生息しているのは北ア、南ア、乗鞍岳、御嶽

山、頸城山塊の5ヶ所の高山帯に限られていた。しかも、1980年代には約3000羽と推測されていた生息数が、2000年代になると、2000羽弱に減少していると言われた。これを受けて環境省は、2014年からライチョウの保護増殖事業をスタートさせていたが、その事業を主体的に進めていたのが世界的なライチョウ研究者、中村浩志・信州大学名誉教授である。

中アでライチョウ発見のニュースは、保護増殖事業に強いインパクトを与えた。中村教授を中心にライチョウの「復活作戦」が始まったのである。当時、著者は朝日新聞長野総局に勤務し、山岳担当の記者として活動していたが、「前代未聞の挑戦を目の当たりにして心が躍った」と記す。

「極めて困難なプロジェクトであることは間違いない。そのドラマを追ってみたい。そして、ライチョウを巡る一部始終をジャーナリストの視点から記録したい。そんな思いを持つようになった。」(「序章」より)。こうして生まれたのが本書で、著者が定年直前に早期退職までして書き上げた労作で

ある。

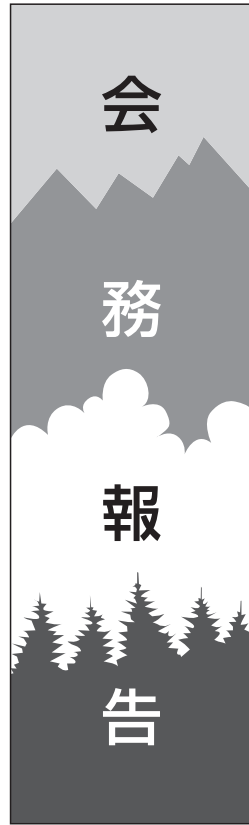
著者とライチョウとの出会いは、ニホンザルがきっかけだった。2015年8月31日、長野県庁で「北アルプスのライチョウ調査の報告」記者会見が開かれた。その折、中村教授から「生息数の減少が懸念されるライチョウの天敵として、新たにサルが加わりました」として、サルがライチョウを捕食している衝撃的な写真が公開された。ライチョウが置かれている危機的な状況を多くの人に知ってもらいたいという、中村教授の熱い気持ちがかもった会見だったという。この会見から著者とライチョウ、そして中村教授との長い付き合いが始まった。

ドラマチックな「復活作戦」の経過や、「失われた自然を取り戻すには、狂気ともいえる執念で人生を捧げなければならない。」(探検家で作家・角幡唯介氏のコメント)と言わしめた中村教授の情熱的な活動ぶりは、本書を手に読み取ってもらいたい。ライチョウが、筆者の故郷佐渡島のトキや冒險家・植村直己さんが生まれた豊岡市のコウノトリの二の舞にならないうように、切に願っている。我々登

山者も保護に協力し、見守ってきたいもの。

最後に私事で恐縮だが、ひと言記しておきたい。当初、ライチョウの研究者として知られていたのは、信州大学教育学部の羽田健三教授である。筆者は山と溪谷社に在職中、羽田教授に『登山者のための雷鳥学』(仮題)という本の執筆を依頼、仮目次まででき上がって

いたが、残念ながら日の目を見ることはなかった。その羽田教授が考えていたのが、中アのライチョウ復活作戦で、恩師の果たせなかつた夢のプロジェクトを実現させたのが、後継者としてバトンを受けたが、復活作戦は見事に成功したのである。(節田重節)



令和6年度第3回(6月度)理事会
議事録

日時 令和6年6月13日(木) 19時
00分〜20時30分

場所 集會室およびオンライン
(Zoom)

【出席者】永田・桐生・飯田副会長、
長島・南久松・平川各常務
理事、松田・望月・原田・
猿渡・池田・久保田各理事、
石川監事

【欠席者】橋本会長、川瀬理事、佐

野監事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・関西支部設立90周年事業募金
について(南久松)(条件付賛成12、
反対0)

2・支部事業委員長の交代につい
て(松田)(賛成12、反対0)

3・デジタルメディア委員長の交
代について(永田)(賛成12、反対
0)

4・広報委員会の設置について
(永田) (賛成12、反対0)

【協議事項】

1・総会の準備について協議した
(長島)

2・紺綬褒章の申請について協議した
(長島)

3・超党派山の日議員連盟総会への対応について協議した(久保田)

4・会報の電子データの利用検討について協議した(永田、長島)

5・U A A A長岡大会(国際山岳平和祭)への対応について協議した(桐生、長島)

6・常務理事会の話題(今後の理事会など少し先を見て)について協議した(長島・久保田)

【報告事項】

1・入会承認報告(橋本)

2・寄附金および助成金受入報告(南久松)

3・台湾体育署とのミーティング参加について(松田)

【その他】

1・会報「山」6月号の進行について(節田)

ルーム日誌 6月

3日 記念事業委員会(山岳古道調査) アルパインスキー

4日 広報委員会 スケッチクラブ

5日 山行委員会

6日 常務理事会 YOUTH CLUB委員会 山岳地理

7日 「山の日」事業委員会 入会説明会

10日 マウンテンカルチャークラブ アルパインスキークラブ

11日 自然保護委員会 スケッチクラブ フォトクラブ

12日 学生部 山想クラブ かつぱの会

13日 理事会 九五会

14日 図書委員会

17日 総務委員会

18日 麗山会 沢登り同好会II

19日 つくも会 三水会 休山会

20日 科学委員会 山遊会 みちのり山の会

21日 フォトクラブ 登山講習会

24日 東京支部設立プロジェクト アルピニズムクラブ 緑爽

会

25日 支部事業委員会 00会 アルパインスキークラブ(幹事会)

26日 子どもと登山委員会 医療委員会

27日 学生部

28日 記念事業委員会 アルピニズムクラブ

6月来室者 309名

会員異動物故

的場大祐(2667) 24・5・31

山野井武夫(4633) 24・6・4

舟橋明男(5105) 24・5・8

奥野富士郎(10443) 24・3・14

石光久仁子(10635) 24・5・23

仲田道彦(11803) 24・4・26

INFORMATION 山行委員会

長岡文和(14749) 24・6・9 退会

小嶋誠孝(6116) 関西

黒田正雄(7310)

西尾俊子(7965)

寺本昭一(8433)

阿南誠志(10390) 熊本

石垣勝敏(12933) 東海

平山正明(12988) 福岡

山崎和子(13522) 北九州

浅原明男(13618) 京都・滋賀

渡辺庸子(14386) 信濃

黒羽隆雄(14768)

四国山岳植物園岳人の森(15711) 四国

川崎真琴(15750) 東京多摩

坪井沙也子(16866) 埼玉

田治美璃(A0520) 東京多摩

藤川奈那央(A0567)

◆四国八十八ヶ所歩き遍路 逆打ち 3高知 山行委員会

四国八十八ヶ所1200kmを、春2回、秋2回の区切り打ち1年で歩きます。2024年は閏年、逆

打ちの年で、順打ちの3倍のご利益があると言われています。4年に一度のチャンスです。お大師さんに会いませんか？今回は38番金剛福寺から28番大日寺まで。

日程 10月13日(日)～10月20日(日)
7泊8日

集合 10月13日(日) 土佐くろしお

鉄道宿毛駅、7時集合

行程 13日 月山神社―竜串 14日 38番―足摺岬 15日

市野瀬―四万十市 16日

黒潮町―土佐佐賀 17日

37番―土佐久礼 18日 36番―宇佐 19日 35番―33番―長浜 20日 32番―28番―野市駅(17時ごろ解散)

歩程 1日20～30km余

(健脚向き)

費用 参加費1万円(通信費、写真代など)、1日1万円(宿泊代はその都度精算、賽銭、納経、昼食代)、傷害保険は各自お掛けください。遍路用品は約2万円。別途往復交通費。

定員 8名(先着順)

申込み 10月1日(火)まで

数見直 直

☎090-7204-46

68 ☒sanko@jac.or.jp

◆学術講演会「かながわの山を知る」の開催案内

神奈川支部

この2月、当支部で出版した『かながわ山岳誌』の記念講演会の第2弾。今回は学術的視点から神奈川の山を分かりやすく解説します。日時 9月29日(日) 13時30分～16時(13時10分から受付)

場所 かながわ県民センター2階ホール(横浜駅西口徒歩5分)

プログラム 「神奈川の山の生立ち」平田大(二)神奈川県立生命の星・地球博物館元館長)／「植物から見た丹沢箱根、小仏山地」勝山輝男(神奈川県立生命の星・地球博物館元芸芸部長)／「相模の山岳信仰と修験道」鈴木正宗(慶應義塾大学名誉教授・日本山岳修験学会会長)

参加費 無料 ただし、参加には事前申込みが必要です。氏名を記してkana.sec19@gmail.comへ。問合せも同じメールアドレスへ。

＊講演概要や会場への地図などは、<https://jac1.or.jp/event-list/2024052931121.html>を参照してください。

◆ロッジ山旅に「山の絵ギャラリー」開設

八ヶ岳南麓の山梨県北杜市大泉のロッジ山旅は、オープンから25年、山を趣味とする者にとつて心休まる宿として、また山の本が揃う宿として親しまれてきた。この春から、客室の一部に「山の絵ギャラリー」が開設された。すがぬまみつこ、中村好至恵、北島洋一各氏(いずれも本会会員)の作品約100点が展示され、三者三様の山々の描写を楽しむことができる。オーナーの長澤洋氏(会員番号12069) 好みの静かな音楽が流れ、窓外には緑が色濃く、カレーやコーヒール・ケーキセットのサービスメニューがあり、これも嬉しい。入場無料。11～16時。木・金定休。☎0551・20・5634。

山の宿として、従来どおり宿泊者には八ヶ岳や周辺の山への送迎に応じてくれる。(南川金一)

◆編集後記

●チャールズ英国王の晩餐会におけるスピーチの全文を拝見したところ、我々登山者にとつて大変嬉しいコメントがありました。《19世紀後半、ウォルター・ウェストンを始めとする英国人の登山家たちが、日本で目にした風景に魅了され、日本においてレクリエーション登山を広めるきっかけを作りました。山登りを愛する気持ちは今や多くの日本と英国の国民の皆さんが共有しており、とりわけ個人レベルで言えば、陛下と私自身に当てはまりますね!》(産経ニュースより)

●スピーチの冒頭にこのエピソード持ってくるあたり、さすが「遊びの文化」を生んだルーツ国の君主。日本の政治家や官僚たちも見習ってほしいものです。(節田重節)

日本山岳会会報 山 950号

2024年(令和6年)7月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 橋本しをり
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社